

「みんなの舞台」の建設

—震災後3、4年目における仮設住宅地支援の可能性

Construction of 'A stage for all'
—Attempts for Temporary Housings 3-4 years After the Disaster

井本佐保里 Saori Imoto

東日本大震災直後におけるマサチューセッツ工科大学と東京大学の取組み

東日本大震災後の復興支援の特徴のひとつに、建築家や建築系研究室などのチームによって、仮設住宅そのものや、団地内へのコミュニティスペースの設計・建設に関連する活動が多く行われた点を挙げる事ができるだろう。筆者が所属する東京大学建築学科の計画系研究室は、高齢社会総合研究機構と共に「コミュニティケア型仮設住宅」を提案し、岩手県遠野市と釜石市平田地区における仮設住宅の設計を担当した。一方、同研究室と2012年より東北地方で休憩スペースを建設するワークショップを共催している^{図1}マサチューセッツ工科大学は、神田駿教授を中心にMIT Japan

3/11 Initiativeを組織し、宮城県南三陸の仮設住宅地内に交流スペースを創出する活動などを続けてきた。

住田町仮設住宅の状況

一方、岩手県気仙郡住田町は、東日本大震災後いち早く町独自の判断で木造仮設住宅を整備したことで大きな注目を浴びた。豊富な地産材を使った戸建ての木造仮設住宅を、町内3カ所(火石団地、本町団地、中上団地)全93戸建設した。居住者の多くは同じ気仙地方に属し、古くから住田町とつながりの強かった大船渡市と陸前高田市からの避難者である。

このなかで、中上団地は2008年に廃校となった旧下有住小学校校庭に整備された団地(63戸)で、校舎は仮設住宅集会所として使われている。一方、震災から3年が過ぎた現在、自力再建などによって約半数が転出し、空き家が増加している状況にある。これら空き家は、冬の雪置き場の確保や防犯上の理由などか

東京大学大学院建築学専攻、復興デザイン研究体・助教/1983年生まれ。2013年東京大学大学院修了。博士(工学)

ら一部が撤去されている他、住田町では、居住者が退去する際に1棟3万円(移築費は自己負担)で住宅を払い下げる取り組みを行っており、団地内には点々と空き地が生まれていた^{図2}。

「みんなの舞台」の設計と建設

中上団地におけるプロジェクトは、震災直後から住田町仮設住宅地における支援を継続的に行っている邑サポートに住田町を紹介いただいたことにより、2014年春から始まった。邑サポートや住田町役場、下有住地区公民館、中上団地自治会とのやり取りを進めるなかで、仮設住宅地内に生まれた空き地に、団地や周辺住民の方が利用できる休憩スペース(東屋)を建設することとなった。

最初に議論となったのは敷地であった。まず、候補となったのが敷地端の空き地だったが、一部の住民の方からは端にあっても利用しないとの声を聞かれた。中上団地では、日頃からお母さんた

ちが路地にベンチを出してお茶っこをしたり、お酒好きの住民の方の住宅が軒を連ねる「のんべえ横丁」と名付けられた路地も存在する。このようなもともとにぎわいのあるエリアにも近く、また気軽に立ち寄りやすい場所、つまり団地の中



図1 2013年8月に南三陸で建設したRin Rin Popolo
[撮影:陳建中]



図2 2014年春の中上団地の様子。空き地が点在している [図2-4 筆者撮影]



図3 木ブロックを積み上げた構法の柱



図4 完成時の様子。みんなの舞台でくつろぐワークショップ参加者と住民

中央近くに建設すべきとの意見が挙がった。一方、将来仮設住宅がすべて撤去された後のことを考えると、敷地中央に東屋が残ると邪魔ではないか、という話も出た。そもそもこの東屋がこの先何年間使うものとする(できる)のか、ということも問われた。紆余曲折の末、まずは現在仮設住宅に住まわれている方が使いやすいことを最優先に、団地中央の十字路に面する空き家を解体し、そこに建設することになった。そして、仮設住宅が撤去された後にも地域の方に使ってもらえる場合には移築します、ということになった。解体した仮設住宅は近くに自力再建した住民の方によって引き取られることとなった。

設計・施工にあたっては、東京大学院生を中心に、住田町仮設住宅の設計施工を請け負った住田住宅産業株式会社に協力いただきながら進めた。学生らによるセルフビルドが可能ないように、簡易で大人数でくみ上げられる構法であることや、金物は極力使わないということなどを踏まえて設計を進め、柱は図3のような木レンガを積み重ねていく構法とした。基礎は仮設住宅の木杭を一部活用し、屋根には地元の夏まつりの廃材である竹を譲っていただき垂木とした。その後、2014年8月4日から12日の9日間、現

地で東京大学およびマサチューセッツ工科大学の合同ワークショップを開催し、両校から22名の学生・教員が参加した。この東屋は神田教授によって「みんなの舞台(A Stage for All)」と命名され、当初の設計部分に加え、スロープや庇、踏み台や手すりなどが次々と提案、追加されていった。ここでは下有住地区公民館館長が、竹、切り株、その他さまざまな建材や道具を次々と調達してくださった。このように現場で手が加えられたことで、3方向からアクセスできる、多様な居方ができる空間となった。

ワークショップ終了後も、塗装や雪対策のために葭^{よしず}箆を下ろす作業などで現地を訪れているが、お母さんたちのお茶っこや、子どもの遊び場としても利用されていると聞いている。

震災後3、4年目にできること

「みんなの舞台」の特徴のひとつに、震災後3年目に建設された点を挙げることができるだろう。震災直後の仮設住宅整備においては、できる限り多くの住宅を迅速に整備していくことが優先されるため、集会所などの共用スペースの整備は最低限に留まることが多い。一方、震災後4年が経過し仮設住宅地には空き家が

増加しているものの、この利活用についての検討は進んでいないと言われる。そのようななか、住田町における居住者に住宅を払い下げる取組みは画期的であると言えよう。また、そのことによって生じた空き地を新たな休憩スペースへと転換した「みんなの舞台」も、従来のように付加的に集会スペースを増設していく手法とは異なった、仮設住宅地更新の新しい試みであると言えるだろう。

今なお、多くの方が仮設住宅における生活を継続せざるをえない状況にあるなか、時間の経過とともに増加していく空き地を資源としてとらえ直し、積極的に仮設住宅団地の居住環境の改善に活用していくべきだろう。長引く避難生活のなか、変化していく住民の方の居住環境やコミュニティへのニーズの変化に合わせて「空き地」の活用が望まれる。

最後に、変化する仮設住宅団地の状況を見極めながら支援を続け、現地と外部支援者とをつなぐ役割を果たしている邑サポートの取組みに、また、メンバーを温かく迎え入れてくれた住田町の方々に心からお礼を申し上げたい。